2025年3月16日

四旬節第2主日

菊地 功 枢機卿　メッセージ

四旬節は、わたしたちが信仰の原点に立ち返るときです。希望の巡礼者として歩んでいるわたしたちに、福音は、共通の救いの記憶、すなわち共同体の信仰の原点に立ち返ることの重要性を教えています。栄光に光り輝くイエスにこそ、わたしたちの信仰の原点である希望があることを、ルカ福音は伝えています。ペトロ、ヨハネ、ヤコブにとって、信仰の原点は、御変容の出来事の経験でありました。わたしたちの原点としての体験は何でしょうか。この四旬節に、あらためてわたしたちに共通する希望の源を見つめ直しましょう。
その原点は、一体どこにあるのでしょうか。

創世記は、まだアブラムと呼ばれていたアブラハムを神が選び、契約を結ばれた出来事を記しています。暗闇の中で天を仰ぎ、「星を数えることができるなら、数えてみるが良い」と告げられたアブラハムの驚きを想像します。アブラハムの信仰の原点は、暗闇に満天の星を眺め、未来に向かって人間の想像を遙かに超えた約束を与えられた、その夜の驚きであったと思います。

ルカ福音は、御変容の出来事とそれを体験した弟子たちの驚きを記します。神の栄光を目の当たりにしたペトロは、何を言っているのか分からないままに、そこに仮小屋を三つ建てることを提案したと福音は伝えます。きっとペトロはその輝く栄光の中にとどまりたかったのでしょう。

福音はモーセとエリヤが共に現れたと記します。この二人は律法と預言書の象徴、すなわち旧約における神とイスラエルの民との契約を象徴します。その中で神はイエスを名指しして、旧約ではなくイエスこそがそれを凌駕する存在であるとして、「これはわたしの愛する子。これに聞け」と告げたと記されています。この日の神の栄光を目の当たりにした驚きと、その中でイエスこそが旧約を凌駕する新しい契約の主であると告げられた弟子たちの驚きは、教会の信仰の原点でもあります。わたしたちの希望の源

はイエスにあることが明示されました。

教皇様は大勅書「希望は欺かない」にこう記しています。

「希望と忍耐が影響し合うことから、次のことが明らかになります。つまり、キリスト者の人生は目的地である主キリストとの出会いへと導いてくださるかけがえのない伴侶、すなわち希望を養い強める絶好の機会を必要とする旅路だということです（5)」

巡礼の旅路は忍耐を必要とする旅路です。わたしたちは主との出会いにこそ救いの希望があることを心に刻み、忍耐のうちに、しかし希望を持って歩みを続けます。この世の栄光にとどまることはしません。そこに希望はありません。イエスとの出会いは、この世の栄光をうち捨て、苦難の道を忍耐を持って歩み続けた先に存在します。わたしたちの信仰の原点は、イエスの言葉と行いとの出会いです。そこにこそ希望があります。その希望に導かれた、わたしたちはイエスとの出会いへと歩みを進める者でありたいと思います。